

11 胃未分化型腺癌の臨床病理学的検討

藍澤喜久雄・奥村 直樹・森岡 伸浩
清永 英利・宮下 薫

燕労災病院外科

胃未分化型腺癌の低分化腺癌 (por), 印環細胞癌 (sig) の臨床病理学的検討を行った。手術胃癌 1040 例中, por の充実型 (por1) は 59 例 (5.7%), 非充実型 (por2) は 190 例 (18.3%), por 全症例で 249 例 (23.9%), sig は 137 例 (13.2%) であった。肉眼型は, por1 で限局型が 43 例 (72.9%), por2 で浸潤型が 140 例 (73.7%), sig で表在型が 85 例 (62.0%) と多かった。肝転移頻度は por1 で 11.9% とやや多かったが, 腹膜転移率は各群間に差はなかった。胃壁深達度は por1, por2 では T2 以上がそれぞれ 49 例 (86.0%), 151 例 (86.8%) であったが, sig では T1 が 77 例 (57.0%) であった。リンパ節転移陽性率は por1 ; 84.2%, por2 ; 75.3%, sig ; 41.5% であった。5 年生存率は por1 ; 69.8%, por2 ; 59.1% と両者の間に有意差はなく, sig は 87.0% であった。低分化腺癌の por1, por2 の増殖様式はそれぞれ異なるが, 予後の差はなかった。また, 印環細胞癌は早期のものが多。

II 特別講演

「胃癌の機能温存手術」

金沢大学大学院医学系研究科
がん局所制御学教授

三輪 晃 一

第46回新潟造血管腫瘍研究会

日時 平成16年3月5日(金)
午後6時15分～

会場 新潟大学医学部
有壬記念館 2階 大会議室

I 一般演題

1 免疫グロブリン JH 鎖の再構成を認めた T-GLDP の 1 例

本間圭一郎・瀧澤 淳・増子 正義
鳥羽 健・相澤 義房・橋本 誠雄*
古川 達雄*・青木 定夫**
成田美和子***・高橋 益廣***
中村 直哉****

新潟大学医歯学総合研究科血液学分野
同 医歯学総合病院高密度無菌治療部*
同 保健管理センター**
同 医学部保健学科***
福島県立医科大学病理学第一講座****

症例は 29 歳女性。2001 年 8 月, 鼻出血を主訴に近医を受診。肝脾腫, 汎血球減少, 末梢血顆粒リンパ球増加, 鼻腔内腫瘍, 多クローン性高ガンマグロブリン血症を指摘され, 9 月当科入院。末梢血, 鼻腔内腫瘍のリンパ球表面抗原解析で CD3+, CD4-, CD5+, CD8+, CD10-, CD20 弱+, CD56-, CD57+, HLA-DR+, TCR α/β +, であった。鼻腔内腫瘍の病理組織では小型から中型の腫瘍細胞が集簇性に認められ, 免疫組織化学染色では, TIA-1+, GranzymeB+, EBER-1- であった。汎血球減少症の改善を目的として, 開腹下脾臓摘出術を施行した。末梢血単核球, 骨髄単核球, 脾臓, 鼻腔腫瘍の Southern 解析を行ったところ, T 細胞受容体 β 鎖および免疫グロブリン JH 鎖の再構成を認めた。以上から α/β -T-GLPD と診断, 緩徐な経過と考え外来経過観察となっていたが, 2003 年になり頸部リンパ節腫脹と高ガンマグロブリン血症が徐々に進行したため, 当科再入院し, 第三世代化学療法 (P-